

『剣を鋤に、槍を鎌に』(イザ 2:1～5)

紀元前8世紀後半、ユダのアハズ王はイスラエルとアラムとの反アッシリアの同盟に加わることを拒否し、アッシリアに支援を求めました。その結果、イスラエルはアッシリアに滅ぼされ、ユダはアッシリアの実質的な属国となりました。

イザヤは、ユダは大国の軍事力に頼るのではなく、頼るべきは神さまであると語りました。2～4節の言葉はイザヤと同時代の預言者ミカによるミカ書にも殆ど同じ形で記されています。イザヤはエルサレムは決して滅びないという希望を語り、ミカはエルサレムの滅びを語りつつ、なお平和のメッセージを告げています。

2～3節で、イザヤは、いつの日にか、エルサレムこそが世界の中心として高くそびえ、ヤハウェの教えと言葉を求めて、世界中の諸国、諸民族が巡礼の旅をして流れのように集まってくると言います。それは平和の世界です。4節の言葉は世界平和の理想を表す言葉としてよく知られ、国連本部ビル前の「イザヤの壁」に記されています。元の言葉はヨエ 4:10 の「お前たちの鋤を剣に、鎌を槍に打ち直せ。」と思われます。まだ軍隊が常設されていなかった時代、敵が攻めてくると農民にこのように呼びかけ、農具を武器に作り変えて戦いに臨んだのです。イザヤは、この句を逆にし、武器を捨てて平和を選び取る意志を明確に示しました。今は国々の争いが剣によって解決されているが、終りの日には平和的な調停によって解決され、今は時とエネルギーを戦いの技術を学ぶことに費やしているが、総ての能力を世界に平和と公平を打ち立てるために用いる時が来る、と語るのです。「もはや戦うことを学ばない」には平和への強い意志が見られます。

日本もかつて鋤を剣に、鎌を槍にして、アジア諸国、アメリカと戦争をしました。敗戦後に定められた日本国憲法の第9条一項の戦争放棄は諸外国の憲法にもみられますが、二項の戦力を保持しないことと交戦権の否認は世界に類を見ない斬新な規定として評価されてきました。憲法制定直後に作られた教科書『新しい憲法のはなし』の挿絵には、戦車や軍艦や戦闘機をるつぽで溶かして、新しい電車や客船や自動車などを造ることが描かれています。1946年1月24日、GHQのマッカーサーと会談した幣原首相は「戦争を放棄するというようなこととはつきりと世界に声明すること、それだけが日本を信用してもらえる唯一の誇りとなることじゃないだろうか」と戦争放棄を提案したことが羽室メモに記されています。九条の「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し」という平和主義の条文はGHQ草案にはなく、衆議院帝国憲法改正案委員小委員会での熱心な議論で生み出されました。私たちキリスト者は、今こそ、このイザヤの幻をどう受けとめるか、問われているのではないのでしょうか。